

「けじめ」

けじめある子どもを育て、けじめある学級をつくるために、このプログラムでは、「自ら進んで決まりや約束を守ることができる子どもを育てること」に主眼を置き、「自分が守る」「自分で判断する」「進んで示す」という、三つのステップに分けて紹介していきます。

	Hop 【自分が守る】	Step 【自分で判断する】	Jump 【進んで示す】
	自分の学級を見回したとき、「けじめがないな、身の回りのルールが守られていないな」と感じることはありませんか。子ども自らが進んでルールを守ろうとする思いを育んでいくために、まずは「ルールがあることの意味や大切さに気付かせる」場や機会をつくり、納得した上でルールを守る個人を育てることに力を入れてみましょう。	ルールがあることの意味を納得し、自分で守れるようになったら、次は視点を「他者」に向けてみましょう。ここで目指すのは、「ルールや約束だから守る」のではなく、「集団の中で自分が何をすればよいか、自分で判断し行動する」姿です。他者、集団との関係性の中で、相手の思いを考え、自分の取るべき行動を判断し、行動に移すことができる子どもを育てていきましょう。	ジャンプは、「進んで示す」です。他者の気持ちを考えて自主的に判断し行動できるようになった集団の良さを全員が感じて、その中で生活することに心地良さを感じることができるようになることを目指しましょう。
教員の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ①なぜ学級や学校にはルールがあるのかを考え、考えを出し合う機会をつくる。 ②けじめがない、あるいは守るべきルールが守られていないと教員自身が感じたとき、または、子どもが訴えてきたとき、教員と子ども相互でルールを守るについて話し合う機会を設ける。 ③ルールが守れていることを認め合う機会を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> ①学級目標や行事に対する目標を学級全体でつくり、目標に対する行動を自己評価、相互評価させる。 ②集団として、自分たちでルールを守ろうとしたり、互いに注意し合ったりする自治力や自浄作用を高めるためにはどうすればよいかを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①子どもが「自分が誰かの役に立っている」「みんなから認められている」という自己有用感を感じられる場や機会を意図的に設ける。 ②教員が何も言わなくても、子どもが感じて動く、判断して動く場面を目にしたとき、その行動を場面に応じて価値付ける。
指導のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ①話し合いは小グループで行うなど、全員が発言できる形態や雰囲気をつくることに気を配る。中学校、高等学校ではディベート方式も考えられる。小中学校では道徳の授業の中で考えさせるのも良い。 ②先延ばしにせず、タイミングを逃さず、タイムリーに行う。教員が自分の学校や学級が、誰もが安心して過ごせる場所になっているか、正義が通る雰囲気があるかという視点を持ち、子どもに自分たちの行動を振り返らせ、今後について考えさせる機会にしたい。ルール自体が学校、学級の実態に合っていないときにはルールそのものについての改善も可能だが、見直す視点が、易きに流れたものにならないように配慮する。 ③ルールが守られている状態の良さ、当たり前のことを当たり前でできることの素晴らしさ等を意図的に子どもの前で語り、ルールを進んで守っている子どもを互いに認めようとする雰囲気づくりに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ①学級目標や行事に対する目標をつくるプロセスを大切にし、子どもの思い、担任教員の願いが詰まった目標、集団の向上につながる目標にする。抽象的な言葉よりも行動目標的な言葉を用いると評価がしやすい。学級目標も年度当初に立ててそのままということが多いが、少しずつマイナーチェンジしたり、付け加えたりして変えていくことも可能である。 ②ルールを守らせることよりも、ルールを守れる集団になるためには何が必要か、という視点に立ち、個人よりも集団の高まりや成長をねらいとした働き掛けを増やすとよい。例えば、「何でも言い合える集団を作ること」がねらいであれば、自分も相手も大切にする表現であるアサーションのエクササイズを子ども相互で行ってみるのもよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ある程度の枠組みは教員が与えても、役割の決定、活動内容や方法等は子どもの考えを尊重することで、自発性、主体性を育てることにつながる。また、子どもの取組に対しては「結果」よりも、相手や集団のためにどう取り組んだかという「過程」や「努力」に注目し、全体の場で褒めたり、個別にねぎらいの言葉を掛けたりすることを大切にする。 ②何も言わなくても、感じて動ける子どもがクラスの中にいることや、そのことによって、けじめある雰囲気を保つことにつながっていることを「学級の誇り」として価値付けたい。また、上級生が集会など全体の場で下級生の手本となる行動を示すことができたときには、そのことが学校の良き伝統をつくっていると価値付けるとともに、自分たちもこの良き伝統を継承したいという思いを下級生にも持たせるようにしたい。
期待できる効果 (子どもの変容)	<ul style="list-style-type: none"> ○ルールそのものや、ルールに対する自分たちの行動について考えたり、話し合ったりする機会をつくることにより、ルールを守ることで、安心して落ち着いた生活ができていることに気付き、自ら進んで決まりや約束を守ろうという思いが育つ。 ○ルールが守られていたことを互いに認め合う雰囲気ができ、子どもの意識が「～しなければならない」から「～しよう」に変わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学級目標や行事への目標設定において、集団の向上をねらった目標を持たせることにより、子どもの意識が「ルール」から、「集団」という人やその雰囲気に向くようになる。また、自己評価に加え、相互評価で学級全員の行動を振り返ることにより、他者の学級に対する貢献や周囲への気遣いにも目が向き、自分もその集団の中で役に立ちたい、認められたいという思いが湧く。 ○ルールを守らせることよりも、子どもが自分たちで守ろうとする気持ちをもったとき、自分以外の他者の存在や行動により関心をもつようになるとともに、他者や集団に与える影響を考えながら行動できる子どもが増え、集団としての高まりにつながっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分が誰かの役に立った、認められたと感じられることによって、集団や学級に対する愛着や充実感が生まれ、進んで集団や他者のために行動しようという意識が高まる。また、教員がこのような行動をとった子どもを大切にすることで、学級全体に仲間の努力や集団への貢献を認め、感謝しようという意識が芽生え、自分もそのような存在になりたいと考えて行動する子どもが増える。 ○教員が自分の所属する集団の「けじめが保たれた状態」について、すばらしいこと、誇りであることと価値付けることで、子どもは、ルールや約束を守り、他者や集団の思いに沿って、主体的に行動できる自分たちが素敵、そのことによってつくられる「けじめが保たれた集団」の中にいることが好き、と感じるようになる。また、そのことがけじめある学級、学校の風土づくりにつながり、「〇〇生らしさ」といった目に見えない良き伝統をつくることにもつながっていく。